

大学生の心理相談抵抗感に関する中日比較研究

姜 鳳麗*, 浅川 潔司**, 南 雅則***, 祁 秋夢*

(平成22年6月18日受付, 平成22年12月3日受理)

Resistance against counseling in students : A cross-national study in China and Japan.

Feng Li Jiang *, Kiyoshi Asakawa **, Masanori Minami *** , & Qiumeng Qi *

The present study was designed to investigate how different the resistance against counseling in Chinese and Japanese students. Further, the effect of narcissism on resistance was examined. 184 Chinese students and 123 Japanese students participated in the study. Resistance against counseling was measured by Inventory of resistance against counseling (IRAC, Jiang, Asakawa, Tang, Natsuno & Takii, 2010). Takahashi's Narcissism Scale (TNS, 2006) was used for measuring personnel level of Narcissism. 2(nation) × 2(gender) × 3(level of narcissism) of ANOVA on the IRAC score were employed. Main findings were as follows :

- (1) Chinese students showed significantly higher mean scores of IRAC than Japanese students.
- (2) Significant gender difference was found in subscale of "Face".
- (3) The significant main effect of narcissism on resistance was found out.
- (4) As to subscale of rejection to counselor, An interaction of narcissism level × country was significant.

Those findings were discussed from cross-cultural psychological viewpoints.

Key words : Resistance against counseling, College students, Narcissism, Cross-national study

問題と目的

学校教育相談とは児童生徒の学習面・進路面・生活面の課題や問題に対して、情緒的・情動的・評価的・道具的にもサポートをするため、すべての子どもにかかわり、彼らが社会に巣立っていけるように、学校という時空間をたがやすところのチームによる実践的な指導・援助である(大野,1998)⁽¹⁾。

日本で行われている教育相談は中国では心理諮詢の訳語に該当する。日本において教育相談は1950年代前後アメリカのガイダンス理論が導入されて以降、今日までずっと発展して来たが、銭(1994)⁽²⁾によれば、中国において心理諮詢が行われるようになったのは、1917年からで、心理諮詢についての研究は先進国(例えばアメリカ)と比べるとずいぶん遅れており、残念ながら、1949年以前の中国社会は戦争下の不穏な時期であったために教育相談と治療に関する資料は見つからないという。ようやく1985年に浙江省湖州師範専門学校で大学生を対象として心理諮詢センターが設置されたが、これが中国の

高等教育機関における最初の教育相談の施設であった。現在では中国の全国にある1000あまりの大学の内、40%以上の大学において教育相談の活動が行われており、北京においてはその割合が70%に達している。

近年、中国の経済は目覚ましい発展を遂げたとと言えるが、社会経済の発展にともない社会の変化の激しさは人々の心に大きな影響を与えており、学校への不適応や心理問題などの問題は年々増大している。中国青少年研究中心(2005)⁽³⁾によると、中国の大学生において、就職や学習や経済などのために重いストレスを感じている学生は40%以上であり、また心理問題に目を向けると人間関係が希薄であるとかうまくいかないと感じている学生の割合はそれぞれ10.6%, 6.8%であるという。さらに、中国において大学生の自殺件数を見ると2002年には27件だったものが2006年には130件と年々増加しており(韓, 2007)⁽⁴⁾、北京師範大学心理学院の許燕(2004)⁽⁵⁾は、高等教育段階において、圧力に耐える力が強い生徒は自分で解決できるが、逆に弱い生徒は社会に対する適応能力

* 兵庫教育大学大学院学校教育研究科学生 (Graduate School of School Education, Master's Program in School Psychology, Hyogo University of Teacher Education)

** 兵庫教育大学 (Hyogo University of Teacher Education)

*** 宝塚市立高司中学校 (Takatsukasa Junior High School)

も低く、このような生徒に対して、心理問題を解決するために個別的な援助があると指摘する。

中国教育部(2003)⁽⁶⁾は「普通高等学校大学生の心理健康教育の仕事実施綱要(試行)」を発表し、高等教育機関は大学生の心理健康教育と援助サービスを推進するべく努めると規定された。これにより多くの高等教育機関においては心理相談センターが設立されるようになった。しかし、地域や大学により教育相談の発展に差があり、全国的にみると、北京、上海、天津、杭州などのような大都市は教育相談の発展も早い、大都市と離れた地域、農村地域などにおいてはまだ模索中である。

現在、中国高等教育機関において補導員制度が実施されているが、この補導員制度は1952年に精華大学で始まりその後全国の大学に広がった。現在、補導員は各大学の党員会と人事部によって、大学や専門学校各コースに1～3人が任命され、各コースの学生仕事事務室にその席が設けられている。中国教育部(2006)⁽⁷⁾は「普通高等学校補導員隊伍の建設規定」を発表し、補導員の基準とか業務内容等を具体的に規定した。それによると一般的に補導員の学歴は学士学位以上であり、中国共産党員で、心理学や教育学などの専門的な資格が必要とされている。このような動きは中国高等学生心理問題が重視されていることを裏付けるものであるといえよう。このように補導員は大学生のメンタルヘルスの面において重要な役割を担い、学生の生活面においても学習面においても密接に接触する人物であるため、もっとも学生の悩みの相談に乗りやすい立場にあるといえる。

日本の場合、悩みを相談する相手の割合を見ると高校生では友人(49.0%)、親(25.3%)、学校の先生(0.8%)、誰にも相談しない(14.0%)であり(札幌市教育委員会, 2009)⁽⁹⁾、また中学生では友人(38.0%)、親(23.9%)、学校の先生(6.98%)であった(永井・新井, 2005a)⁽¹⁰⁾。しかし、大学生に対する同種の調査結果はまだ見当たらない。一方、中国の大学生に悩みを相談する相手をたずねると、自分で解決する(31.03%)、クラスメート(19.9%)、担任の先生(17.7%)、親(12.1%)、各科目の担当の先生(11.2%)、スクールカウンセラー(9.0%)という結果であった(謝・宋, 2007)⁽¹¹⁾。つまり悩みを持っている中国の大学生の場合、約3分の1は他人と相談したくないと思っており、悩みを自分の心の中に押し込めているといえる。悩みを持っているにもかかわらず心理相談に行かないことについて、董(2002)⁽⁸⁾は、中国の大学生が心理相談は精神病とか心理異常などの意味と誤解しており、心理的な重い障害がある人や精神的な病気がある人しか心理相談に行かないと思っていることや、また大学生が心理相談室に行くとき教師や他の学生に笑われたというケースもあることを指摘し、その結果、中国の大学における心理相談がまだ正しく認知されてお

らず、中国の大学生が心理相談に対する抵抗感を持っているためであると述べている。本研究の心理相談抵抗感とは、学生が心理相談員に分かってもらいたいという心理と、相談員が信用できない恐れる心理が拮抗することにより生じるものであると考えられる。

遠藤・井上・蘭(1992)⁽¹²⁾によれば、自己開示は対人関係のあり方とそれらの適応の問題と関係し、自己概念や自己概念に対する良し悪しや望ましい望ましくないといった自己評価の結果として生じる自尊感情である。蘭(1986)⁽¹³⁾は、自尊感情は素朴な自己愛、自他の比較による虚栄心、自己の過去と現在の比較による自負心という3つの成分から構成されると述べており、片山(1996)⁽¹⁴⁾によれば、友人に対して抱く自己開示抵抗感は自己を開示する際には何らかの抵抗感が生じること、そして、自己開示は開示対象や開示者本人の特性に起因することが示唆されている。小塩(2001)⁽¹⁵⁾は、自尊感情と関連する性格の特性として自己愛を取り上げ、自己愛傾向の下位側面の中には日常の自尊感情レベルを高める要因となるものと、抑制する要因となるものが存在するとしている。自己愛を測定する尺度についてはRaskin & Hall(1979)⁽¹⁶⁾によってNarcissistic Personality Inventory(自己愛人格目録、以下NPI)が開発されているが、今日多くの自己愛研究において用いられている尺度は小塩(1999)⁽¹⁷⁾がNPIを短縮した自己愛尺度NPI-Sである。NPI-Sは「優越感・有能感」「注目・賞賛欲求」「自己主張性」の3因子から構成される尺度であるが、小塩(1999)⁽¹⁷⁾自身もNPI-Sの問題点として述べているように、自己愛概念を包括的に測定できるとは言えない。これに対し高橋(2006)⁽¹⁸⁾の自己愛傾向尺度は、自己愛の傷つきを恐れ、対人関係から引きこもるという自己愛的パーソナリティ障害と、誇大的行動障害2種類の自己愛尺度と他者とのかわりや過敏な傾向を示す側面と、誇大的で自己顕示的な側面を含む傷つけられやすさを伴う自己愛傾向の尺度に構成されたものである。従って本研究における自己愛の測定にあたり、高橋(2006)⁽¹⁸⁾の尺度は心理相談抵抗感との関連をとらえる上で最適であると判断された。ここでいう自己愛とは、自己を開示する際に他者からの承認欲求が得られないと傷つく傾向を指しているが、本研究では心理相談の際に人からの批判や否定的な評価を受けることを恐れ、恥や傷つきの感情が強くもたらされ、他者への自己開示を恐れることと定義する。

中国における高校生・大学生の心理相談が開始されたのは1980年代に入ってからのことであった。心理相談に関わる研究もこのようにその端緒についたばかりであり、深く広く研究されているとはいえず、中国の大学生における自己愛と心理相談の関連を取り上げた研究はまだ見当たらない。日本における心理相談研究は非行、校内暴力、いじめや不登校などともかわり、中国に比

べればその発展の度合いという点では先行していると言えるが、中国と日本では学校での生活環境や文化背景も異なるため、日本における心理相談研究がそのまま中国に適用するとは言い難い。しかし、中国の学校では非行やいじめなどの問題も深刻になり、社会的にもますます重視されるようになってきている。従って、中国における心理相談研究にあたっては、中日両国を比較しながら日本の心理相談研究の成果を取り入れ、中国の学校での生活環境や文化背景をふまえて検討することが重要である。

そこで本研究においては中日の大学生を対象として、学生たちが悩んだ時、悩みを解決するために、悩みの相談をしたくてもできないと感じていることを把握することができるよう心理相談抵抗感に焦点化された測定尺度を開発し、その検討を行うことを第1の目的とした。相談行動に関する尺度について永井・新井(2005a, 2005b)⁽¹⁹⁾はこれまでの研究を概観し、自由記述の分析基準や架空の悩みを提示する質問紙法の問題点を整理し、中学生が抱きやすい援助ニーズ(石隈・小野瀬, 1997)⁽²⁰⁾の項目として採用した相談行動尺度を開発した。この尺度は「心理・社会的な問題」や「学習・進路的問題」に対して相談行動が見られるのかを測定することができるが、心理相談・相談行動そのものに対する認知や感情に焦点を当てたものではない。従って本研究においては大学生の心理相談抵抗感を測定する尺度の開発を第1の目的とした。

また、自己愛の高低が心理相談に対する抵抗感に及ぼす影響について中日間の検討を行うことを第2の目的とした。

予備調査

目的

心理相談に対する抵抗を測定するための項目を収集し、心理相談抵抗感尺度の開発が主たる目的であった。

方法

研究参加者：兵庫県A大学で臨床心理学を専攻する日本人大学院生10名(男性4名, 女性6名)が予備調査に参加した。

調査時期：予備調査は2008年5月に実施された。

手続き：大学院のカウンセリングの授業において担当教員より「心理相談に対する抵抗を感じている理由を挙げてください」という問いへの回答が自由記述で求められた。

結果

尺度の開発：心理相談抵抗感を測定する項目の整理過程については、本研究の手続きによって、研究協力者の自由記述の内容をまとめる上で、教員養成系大学の大学院で心理学を担当する指導教員1名と大学院生6名(現職教員3名, 中国人留学生3名)によって分類・整理した。

その結果、心理相談抵抗感を測定するための32項目からなる心理相談抵抗感尺度が作成された。

研究1

目的

心理相談に対する抵抗を測定するために、「心理相談抵抗感尺度」を開発し、検討を行うことが主たる目的であった。

方法

研究参加者：本調査については兵庫県B大学に在籍する日本人大学生57名(男性16名, 女性41名)と中国人留学生54名(男性14名, 女性40名)が本研究に参加した。サンプル数は項目の3倍以上であったため、サンプル数は十分と判断した。

調査時期：本調査は2009年6月中旬に実施された。

手続き：日本人大学生は授業時間を利用して一斉に調査を実施した。研究協力者には調査者から、①大学(授業)の成績とは無関係であること、②調査結果は研究目的以外にはいかなる用途にも用いないこと、③回答したくない質問には回答しなくてもよいことが提示され、回答された質問紙はその場で調査者によって回収された。また、中国人大学生には調査者から日本人大学生と同内容のインフォームドコンセントが行われた後、質問紙が個別に配布され、回答後調査者によって回収された。

調査内容：本調査では予備調査で作成された心理相談抵抗感尺度が使用された。質問紙はフェイスシート(国籍, 性別)と予備調査に基づいて作成された心理相談抵抗感尺度によって構成された。質問に対しては「4 全くその通り」「3 かなりそう思う」「2 少しそう思う」「1 全くそう思わない」の4件法で回答が求められた。

質問紙中国版の翻訳として、日本語に堪能な中国人が翻訳し、日本語原文を読んでいない別の中国人がバックトランスレーションした内容が原文の日本語の項目と全く同一であることを確認することで、中国版を完成とした。

結果

因子分析結果：心理相談抵抗感尺度32項目に対して、心理相談抵抗感得点合計の得点分布に著しく偏りが見られた12項目を除外した20項目について主因子法-プロマックス回転による因子分析を行った。固有値1以上で固有値の減衰状況とIT相関係数、因子負荷量、因子の解釈の可能性を考慮した結果、3因子20項目が検出された(Table1参照)。各因子の解釈について、第1因子は8項目からなり、自分は悩みを持っていても心理相談に行きたくないという内容であったので、「心理相談の回避」と命名した。第2因子は7項目からなり、心理相談に行っても効果がないという内容であったので、「カウンセラーへの不信」と命名した。第3因子は5項目から

Table1 心理相談抵抗感尺度の因子分析結果（主因子法－プロマックス回転）

項目	I	II	III	
【第I因子 心理相談の回避】 ($\alpha = .84$)				
自分が言うことは本当に親身になって話を聞いてもらえない	.69	.27	.15	
有効な助言や援助はなかなかしてもらえないと思う	.66	.35	.13	
相談員は専門的な知識を持っていないから、浅く表面的な面接になると思う	.62	.40	.17	
相談室に行きたいけど、正式に施設が設置されていない	.61	.02	.01	
私は自分のことも理解できないし、相談員も問題を解決してくれない	.58	.22	.26	
相談室の妙に静かで、穏やかな雰囲気がかえて不気味である	.57	.24	.40	
心の悩みがあることは恥ずかしくて、人に言えない	.49	.15	.32	
どのようなことを相談すればよいか分からない	.36	.04	.19	
【第II因子 カウンセラーへの不信】 ($\alpha = .82$)				
言うことがうまく伝わらないかと心配だ	.12	.60	.20	
聞いてもらってかえって落ち込むだけにならないかを心配する	.39	.58	.31	
何回カウンセリングをしても、時間がかかって、いつまでも終わらない気がする	.23	.55	.32	
異性のカウンセラーにはきちんと話ができない	.05	.54	.10	
お金がかかるのではと心配になる	.14	.54	.00	
話すことで余計に落ち込むのではないかと考えてしまう	.39	.53	.29	
相談員との相性が良くない	.21	.52	.26	
【第III因子 面子のこだわり】 ($\alpha = .75$)				
気がくっついていると思われるのではないかと心配する	.33	.21	.74	
変な人と思われるかもしれない	.25	.02	.64	
相談員が近所の顔見知りではないかと心配する	.22	.28	.55	
相談室に入っている所を知り合いに見られると恥ずかしい	.12	.13	.48	
相談室は行きづらい場所だ	.00	.20	.38	
	因子間相関	I	II	III
	I	-	.65	.67
	II		-	.50
	III			-

なり、心理相談に行くことは恥ずかしいという内容であったので、「面子のこだわり」と命名した。

信頼性・妥当性の検討：本尺度の内的整合性を検討するために尺度全体と下位尺度でCronbachの α 係数が算出された。その結果、全体は $\alpha = .90$ で、下位尺度ごとにも「心理相談の回避」 $\alpha = .84$ 、「カウンセラーへの不信」 $\alpha = .82$ 、「面子のこだわり」 $\alpha = .75$ の結果が得られた。妥当性の検討に関しては、項目の内容を教員養成系大学の大学院で心理学を担当する指導教員1名と心理学を専門とする大学院生13名で検討した結果「心理相談抵抗感」の因子を説明する上で妥当であると判断した。

考察

従来の心理相談尺度は「心理・社会的な問題」や「学習・進路の問題」に対して悩みの経験と相談行動の関連を測定することができるが、心理相談・相談行動そのもの

に対する認知や感情に焦点を当てたものではない。いずれにせよ、大学生は悩みを持っていても心理相談に行きたくない、その原因を特定することはできず、この点について検討を行う必要があると考えられた。本研究で作成された尺度は、その原因は相談者が心理相談に対してどのように思っているかということと、どうして心理相談に行きたくないのかや、相談行動に対する態度を尋ねることが、心理相談に対する抵抗感の測定にあたっては有効であることが示唆された。

心理相談抵抗感尺度の因子分析の結果から、「心理相談の回避」「カウンセラーへの不信」「面子のこだわり」の3因子が得られた。信頼性については、尺度全体における α 係数は.90以上を示しており、内的整合性という観点からの信頼性は十分に高いといえる。また、心理相談に対して学生自身の声を聞くことのできる尺度であり、心理相談に対する認知や感情は具体的な内容として

含まれている。したがって本尺度は心理相談の研究において大きな意義を持つものであると思われる。

研究 2

目的

自己愛の高低が心理相談に対する抵抗感に及ぼす影響について中日間の検討を行うことが主たる目的であった。

方法

研究参加者：兵庫県 B 大学に在籍する日本人大学生123名（男性44名，女性79名）および中国海南省 C 大学に在籍する中国人大学生184名（男性75名，女性109名）の計307名が本研究に参加した。

要因計画：心理相談抵抗感尺度の合計得点および各下位尺度の合計得点を従属変数とし，国（中国・日本），性（男性・女性），自己愛水準（H群・M群・L群）を独立変数とする，2（国）×2（性）×3（自己愛水準）の3要因分散分析を行った。

材料：①自己愛傾向尺度：高橋（2006）⁽¹⁸⁾によって構成された自己愛傾向尺度が用いられた。この尺度は「対人過敏性」（7項目）、「自己愛的な怒り」（7項目）、「回避性傾向」（7項目）の3下位尺度により構成されていた。尺度は「4よく当てはまる」「3だいたい当てはまる」「2あまりあてはまらない」「1全く当てはまらない」の4件法で回答が求められた。

②心理相談抵抗感尺度：研究1で開発された心理相談抵抗感尺度が用いられた。この尺度は「心理相談の回避」（8項目）、「カウンセラーへの不信」（7項目）、「面子のこだわり」（5項目）の3下位尺度により構成されていた。尺度は「4全くその通り」「3かなりそう思う」「2少しそう思う」「1全くそう思わない」の4件法で回答が求められた。

質問紙中国版の翻訳として，日本語に堪能な中国人が翻訳し，日本語原文を読んでいない別の中国人がバックトランスレーションした内容が原文の日本語の項目と全く同一であることを確認することで，中国版を完成とした。

手続き：日本人大学生は授業時間を利用して一斉に調査を実施した。中国人大学生は質問紙が個別に配布され，質問紙に対して回答するように求められた。調査にあたっては，いずれも調査者から研究1と同内容のインフォームドコンセントが行われた。

調査時間：日本人大学生は2010年1月中旬，中国人大学生は2009年9月上旬に実施された。

結果

因子分析：中日の大学生における自己愛傾向が，高橋（2006）⁽¹⁸⁾と同様の因子構造を示すかを確認するため，

自己愛傾向尺度について主因子法－バリマックス回転による因子分析を行った。その結果，高橋（2006）⁽¹⁸⁾と同様の3因子が抽出された。信頼性係数は全体で $\alpha = .87$ で下位尺度別にみると，第1因子「対人過敏性」は $\alpha = .84$ ，第2因子「自己愛的な怒り」は $\alpha = .82$ ，第3因子「回避性傾向」は $\alpha = .78$ であった。抽出されたそれぞれの因子を見ると，第1因子「対人過敏性」は主として他人からどのように見られるのかといった内容であり，第2因子「自己愛的な怒り」は主として他人を避けようとする傾向を示す内容であり，第3因子「回避性傾向」は他人との関係の中で自己をの存在を認めてもらいたいといった場面における他人に対する自己愛的な感情を示す内容であった。そこで上記のように3つの内容を持つ自己愛傾向尺度が心理相談の際の批判や否定的評価，他者への自己開示を恐れるという内容を包括的に測定しようと判断し，下位尺度の合計得点で後の分析を進めた。得点は21～84点の間にあり，得点の高い方が自己愛傾向は強いと判断された。

次に尺度全体の合計得点について平均値とS.D.が算出され，平均値+1/2S.D.以上の得点者を自己愛傾向H群（N=94），平均値-1/2S.D.以下の得点者を自己愛傾向L群（N=90），これらの得点の間にある群がM群（N=123）に分類された（Table2参照）。

Table2 国・性別の自己愛傾向尺度得点の平均とS.D

		N	平均	S. D.
中国	男	75	50.41	12.43
	女	109	49.04	9.74
日本	男	44	49.55	8.53
	女	79	49.91	9.75

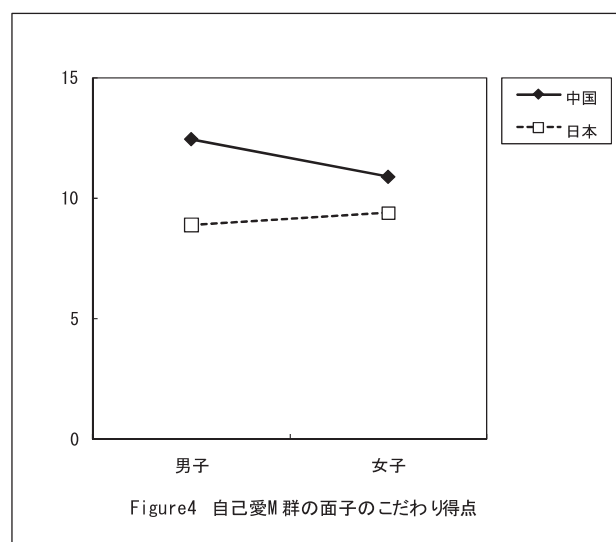
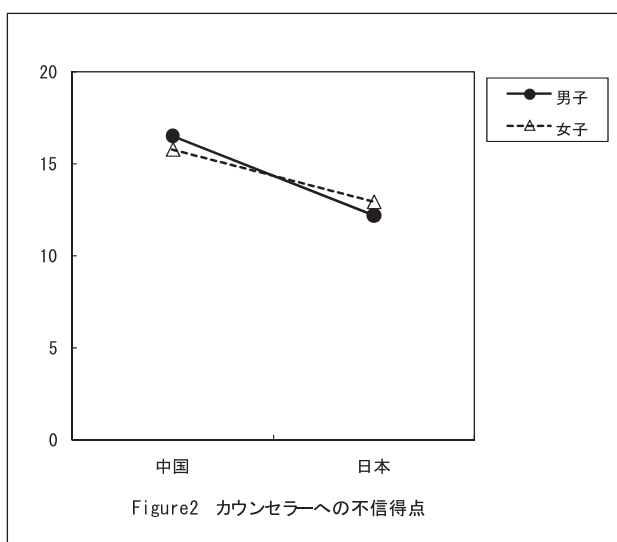
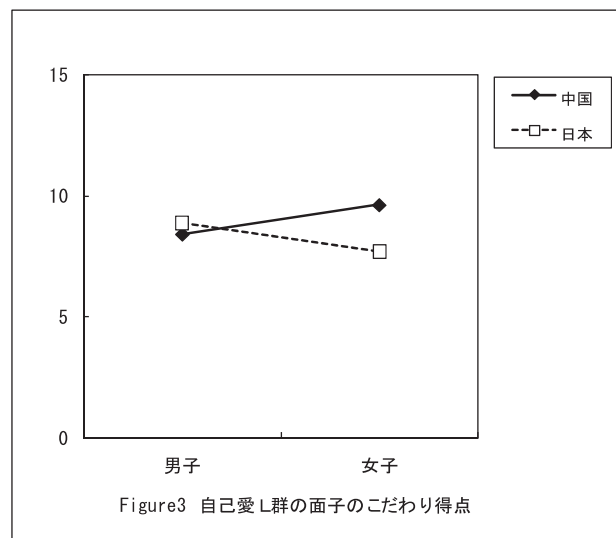
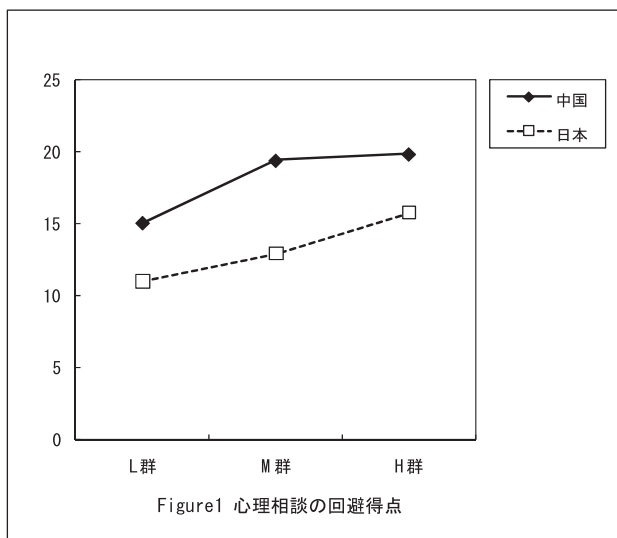
分散分析：本研究の手続きに従って得られた自己愛傾向下位尺度得点を，国・性・自己愛傾向水準別に整理した（Table3参照）。次に心理相談抵抗感尺度の下位尺度の合計得点を従属変数とする2（国）×2（性）×3（自己愛水準）の要因計画に基づく3要因分散分析を行った。

「心理相談の回避」において国に主効果がみられ（ $F(1,295) = 101.72, p < .001$ ），日本人大学生群よりも中国人大学生群の得点が有意に高かった。また，自己愛水準にも主効果がみられ（ $F(2,295) = 29.50, p < .001$ ），Tukey法による多重比較の結果，H群>M群>L群であった（なお“>”は5%水準で有意差があったことを示している。以下同じ）。また，国と自己愛水準の交互作用が有意（ $F(2,295) = 3.17, p < .05$ ）であった（Figure1参照）。単純主効果の検定の結果，中国人大学生群においてはL群よりM群・H群の方の得点が高く（ $F(2,295) = 26.16, p < .001$ ），日本人大学生群においてはL群・M群よりH群

Table 3 国・性・自己愛傾向水準別の自己愛傾向下位尺度得点の平均値およびS.D.

	中国						日本					
	男			女			男			女		
	L群	M群	H群	L群	M群	H群	L群	M群	H群	L群	M群	H群
N	23	27	25	35	44	30	9	23	12	23	29	27
心理相談の回避	14.69 (5.04)	19.66 (3.03)	20.20 (3.93)	15.51 (3.60)	19.22 (4.30)	19.56 (3.91)	11.22 (2.94)	13.60 (3.43)	15.91 (6.93)	10.82 (2.83)	12.31 (2.60)	15.70 (3.80)
カウンセラーへの不信	13.73 (4.23)	17.25 (2.85)	18.56 (3.76)	13.65 (3.41)	16.31 (3.38)	17.30 (2.90)	9.00 (1.85)	12.08 (3.04)	15.50 (6.28)	10.34 (2.14)	13.20 (2.52)	15.29 (3.49)
面子のこだわり	8.39 (2.77)	12.44 (3.19)	12.72 (3.43)	9.62 (2.61)	10.88 (2.69)	12.63 (3.23)	8.88 (2.66)	8.56 (2.56)	10.58 (3.14)	7.69 (1.52)	9.37 (1.67)	11.74 (2.65)

注) 上段:平均値, 下段:S. D.



の方の得点が高かった ($F(2,295) = 11.55, p < .001$)。

「カウンセラーへの不信」において国に主効果がみられ ($F(2,295) = 72.53, p < .001$), 日本人大学生群より中国人大学生群の得点が有意に高かった。また, 自己愛水準にも主効果がみられ ($F(2,295) = 42.06, p < .001$), Tukey法による多重比較の結果, H群 > M群 > L群であっ

た。また, 国と性の交互作用が有意 ($F(1,295) = 3.27, p < .05$) であった (Figure 2参照)。単純主効果の検定の結果, 男性群においては日本の学生群の得点よりも中国人大学生群の得点が有意 ($F(1,295) = 41.51, p < .001$) に高く, 女性群においても日本人大学生群よりも中国人大学生群の得点が有意 ($F(1,295) = 31.43, p < .001$) に高か

った。

「面子のこだわり」において国に主効果がみられ ($F(1,295) = 22.01, p < .001$), 日本人大学生群より中国人大学生群の得点が有意に高かった。また, 自己愛水準の主効果もみられ ($F(2,295) = 27.41, p < .001$), Tukey法による多重比較の結果, $H群 > M群 > L群$ であった。また, 国と自己愛水準の交互作用が有意 ($F(2,99) = 2.57, p < .05$) であった。単純主効果の検定の結果, 自己愛水準のM群とH群において日本人大学生群よりも中国人大学生群の得点が有意に高かった (M群: $F(1,295) = 25.28, p < .001$, H群: $F(1,295) = 6.38, p < .05$)。

さらに, 国と性と自己愛水準の3次の交互作用が有意であった ($F(2,295) = 3.92, p < .05$)。単純主効果の検定の結果, 自己愛水準L群の女性群においては, 日本人大学生群よりも中国人大学生群の得点が有意に高かった ($F(1,86) = 8.75, p < .01$) (Figure3参照)。また, 自己愛水準M群においては, 男性群・女性群とも日本人大学生群よりも中国人大学生群の得点が有意に高かった (男性群: $F(1,119) = 23.59, p < .001$, 女性群: $F(1,119) = 5.90, p < .05$) (Figure4参照)。また, 日本人大学生群では性に統計的な差はみられなかったが, 中国人大学生群においては女性群よりも男性群の得点が有意に高かった ($F(1,119) = 6.03, p < .05$)。

考察

自己愛傾向尺度の因子分析の結果, 高橋 (2006)⁽¹⁸⁾と同様の3因子が抽出された。下位尺度ごとに見ると, 「心理相談の回避」においては中国人大学生のL群よりもM・H群が, また日本人大学生のL・M群よりもH群の方がそれぞれ得点は有意に高く, 自己愛が高いものほど心理相談を回避しようと感じていることが明らかとなった。日本人大学生群においては自己愛得点水準のH群のみ「心理相談の回避」得点が高かったが, 中国人大学生群におけるM・H群の得点が高かったことから, 日本人大学生と比べると中国人大学生の方が心理相談を回避する傾向が強いと言える。小塩 (1998)⁽²¹⁾によると, 自己愛の側面は自分では自信を持っているが, 同時にその自信は他者からの評価によって容易に崩れてしまうようなあり方を意味しているという。また, 町沢 (1998)⁽²²⁾は“自己愛が強いからこそ人と深くかかわることを恐れる”と述べており, 後藤・廣岡 (2005)⁽²³⁾も, 他者不信感が相談する時の自分が傷つくかもしれないと思う気持ちに大きく関わっていることを指摘している。従って, 自己愛が強い人は心理相談を受けると自分の自信が崩されるのではないかと心配すると考えられ, 自己愛が強いほど他者を深く信用できず, 自分の自信が崩れることを心配するため, 心理相談に対する抵抗も強いのだと思われる。

次に「カウンセラーへの不信」においては, 日本人大

学生男子群よりも中国人大学生男子群が, また日本人大学生女子群よりも中国人大学生女子群の方がそれぞれ得点は有意に高く, 中国人大学生は日本人大学生よりもカウンセラーに対する不信が高いことが明らかとなった。このことは中国における教育機関において専門的な知識を持ったカウンセラーの少なさがカウンセラーへの不信につながったためであると考えられるかもしれない。董 (2002)⁽⁸⁾は, 中国ではまだ心理治療と心理相談の専門家が少ないため, 大学は大学生のニーズに十分に答えることができないのが現状であると指摘し, さらに謝・宋 (2007)⁽¹¹⁾は多くの学生が心理相談に行っても効果がないと考えているためではないかと述べている。さらに「面子のこだわり」においては, M群では男女とも中日間に有意差が見られ, いずれも中国人大学生群の方が面子に対するこだわりは強いことが明らかとなった。またL群では男子群に中日間の有意差は見られなかったが女子群に中日間の有意差が見られ, 日本人大学生女子群よりも中国人大学生女子群の方が面子に対するこだわりが強かった。さらにH群はM・L群よりも男女とも日本人大学生群よりも中国人大学生群の方が面子に対するこだわりが強かった。これについては, 中国人の面子思想の影響を受けていると考えられる。「面子」という語は中国語から由来しており日本語では「面目・対面」を意味するが, 中国語においては「誇り」「自尊心」に近い意味で用いられている。易 (2003)⁽²⁴⁾によると, 中国人は「面子」を重んじ, 「面子」のためには時として命を捨てる場合すらあるといわれる。したがって, 中国人は心理相談に行くことは周りの人々に自分の弱さを見せることになり, 自分がどう見られるかを気にかけるためではないかと考えられる。

本研究から, 中国人の大学生は心理相談を回避する傾向が強く, カウンセラーに対する不信も高いこと, さらに面子へのこだわりが強いために, 心理相談に対する抵抗感が強いことが示唆された。このことから, 今後の中国における心理相談活動に対する抵抗感の対策についていくつかの課題があげられる。まず, 心理相談に対する認知を向上させるために, 大学側の体制を整え, 心理相談活動の存在を知らせるような大学生への啓蒙活動が必要である。心理相談は心理問題を持つ学生を対象とするだけでなく, すべての学生を対象としていることが理解されるべきである。また, 中国人大学生のカウンセラーに対する不信が強かったことから, 学校における心理健康教育の中で, 心理相談を受ける理由や意義などを教えることが必要であろう。

最後に, 本研究の限界と今後の課題について述べる。本研究のデータは, 中国側は海南省の教育大学で, 日本側は兵庫県内の教育大学で測定されたサンプルであった。本研究の結果の一般性を確認するためには, 今後,

他の総合大学の大学生の追求調査が必要となるであろう。さらに、中学生、高校生を対象にして、発達の側面を視野に入れた研究実施が望まれる。

心理相談抵抗感尺度は日本人の学生の心理相談抵抗感を測定するために開発された。したがって、尺度項目の収集するための予備調査の対象は日本人学生に限定された。今後、中国の学生に対して使用する場合は、中国人学生の意見も含めて項目を吟味する必要もあろう。

引用文献

- (1)大野精一 1998 学校教育相談の定義について 教育心理学年報, 37, 153-159.
- (2)銭銘怡 1994 心理諮詢と心理治療 北京大学出版社
- (3)中国青少年研究中心 2005 中国中少年發展狀況研究報告
- (4)韓咏紅 2007 中国大学生的黑色5月 联合早报
- (5)許燕 2004 「快樂的钥匙掌握在自己手中」中国大学生就業 CNKI:SUN:JIUY.0.2004-10-005
- (6)中国教育部 2003 普通高等学校大学生の心理健康教育的仕事實施綱要(試行)
- (7)中国教育部 2006 普通高等学校輔導員隊伍的建設規定
- (8)董愛萍 2002 中国の大学における心理相談に関する研究 兵庫教育大学卒業論文(未公刊)
- (9)札幌市教育委員会 2009 平成20年度札幌市の児童生徒の実態に関する基礎調査報告書
<http://www.sec.sapporo-c.ed.jp/h20sv/h20sv.pdf>
- (10)永井智・新井邦二郎 2005a 中学生における悩みの相談に関する調査 筑波大学発達臨床心理学研究, 17, 29-37.
- (11)謝嵐屏・宋卫民 2007 学校心理諮詢为何热不起来 中国教育报 2007, 1, 1, 7.
- (12)遠藤辰雄・井上祥治・蘭千寿 1992 セルフ・エスティームの心理学—自己価値の探求—ナカニシヤ出版
- (13)蘭千寿 1986 対人魅力—自尊感情と好意, 対人行動学会(編)対人行動の心理学 誠信書房 147-153.
- (14)片山美由紀 1996 否定的内容の自己開示への抵抗感と自尊心の関連 心理学研究, 67, 351-358.
- (15)小塩真司 2001 自己愛傾向が自己像の不安定性, 自尊感情のレベルおよび変動性に及ぼす影響 性格心理学研究, 10, 35-44.
- (16)Raskin & Hall 1979 A narcissistic personality inventory, Psychological Reports, 45, 590.
- (17)小塩真司 1999 高校生における自己愛傾向と友人関係のあり方との関連 性格心理学研究, 8, 1-11.
- (18)高橋美智子 2006 高校生における自己愛傾向と学校生活満足感の関連—承認欲求からの影響についての検討—カウンセリング研究, 39, 1, 28-39.
- (19)永井 智・新井邦二郎 2005b 中学生用友人に対する相談行動尺度の作成 筑波大学心理学研究, 30, 73-80.
- (20)石隈利紀・小野瀬雅人 1997 スクールカウンセラーに求められる役割に関する学校心理学的研究—子ども・教師・保護者を対象としたニーズ調査より 文部省科学研究費補助金(基盤研究<c><2>研究成果報告書(課題番号06610095)).
- (21)小塩真司 1998 青年の自己愛傾向と自尊感情, 友人関係の在り方との関連 教育心理学研究, 46, 280-290.
- (22)町沢静夫 1998 現代人の心にひそむ「自己中心性」の病理 双葉社
- (23)後藤安代・廣岡秀一 2005 中学生が抱く「相談することに対する抵抗感」についての実態調査的研究 三重大学教育実践センター紀要, 25, 77-84.
- (24)易中天 2003 闲话中国人 上海文艺出版社